

第4回北九州市文化振興計画改訂検討会

日時：平成27年11月16日（月）10:00～12:00

場所：松本清張記念館 企画展示室

出席者：井生委員、今川委員、柏木委員、古賀委員、近藤委員
椿委員、津村委員、羽田野委員、三船委員（9名）

事務局：大下市民文化スポーツ局長、高松文化部長、
稗田美術・舞台芸術担当課長、古林文芸担当課長、重岡メディア芸術担当課長、
福田松本清張記念館管理運営担当課長、川副漫画ミュージアム管理運営
担当課長、榎田美術館普及課長、用田企画課長（教育委員会）

【全体構成、第1部「総論」】

<三船氏>

たたき台の中には、北九州らしさという面で、漫画や映画、産業革命遺産ということが強調されて書かれていて、北九州らしさが表現されている。しかし、これまでの目標に対する評価はまとめられていない。課題だけが四角囲いでまとめられている。

働く世代の文化芸術活動が少ないというのが課題として出ていたが、それについて戦略や施策の中では、どう進めていくかという方向性が見えにくいと感じた。

<羽田野氏>

全体的に見ると非常によくまとまっている。多岐にわたって配慮しており、「元気発信！北九州」プランでの主要施策の修正全般を今回行っている。

今後5年間で、進捗管理・評価、予算をどうしていくのが課題として挙げられる。

<津村氏>

総論のところだけでいくと、まとめ方としては良いと思う。

アートマネジメント、そういうコーディネーターの育成ということが、テーマとして言葉では出てくるが、戦略2の「次代の担い手を育て」というところに、具体的に盛り込まれていない。基本理念と戦略1、2、3、4というのは背骨になると思うので、ぜひ盛り込んでもらいたい。何度も何度もコーディネーターとか、そういう人たちの人材育成と出てくるのに、戦略の中には具体的には盛り込まれていないということである。

全体として、情緒的な文章と行政用語の羅列が混在して大変読みにくい。この計画は行政内のみの資料ではなく、市民をはじめとした多くの人々が読むということをしつかりと踏まえて作成する必要がある。

<椿氏>

総論についてはよくできていると思う。

<井生氏>

総論に関しては、次の世代に引き継ぐという、この文言は非常に大事だろう。

「シビックプライド」という言い方は、定着しているのか。

<近藤氏>

「シビックプライド」は、基本的には参加するということも含めた、かなり活動的な、そういうイメージで使われている。

<今川氏>

基本理念の説明は、この文章では、具体的にいうと明治 30 年ごろから前のことが抜けている。

やはり長い歴史の中で、この街というのは歴史がきちんと積み重なってきているのだということを書いていかないと、いつまでたっても明治以降の重工業都市として発展した、そこだけに寄りかかっているような気がする。

戦略2だけが非常に具体的。他のところは抽象的な物言いをしている。書くレベルを、抽象的にするなら全て抽象的に書いていくし、具体的なものをここに盛り込むならすべてそろえないと、この戦略2だけが少し違和感があった。

<柏木氏>

第2章に戦略にないようなものも入れている。例えば補助金の削減を、「戦略」でどう位置づけるのかと言われたときに、むしろ「重点」でいいのではないかと思う。

なぜ文化だけがシビックプライドなのかということは、前回も指摘した。子育てもシビックプライドだし、環境もすごくシビックプライドである。「シビックプライドで北九州を元気にします」、「その中の芸術を使います」と言うのなら分かりやすいが、多分、環境にも書き込んでないと思う。子育て支援にも書いていないし、もう少し説明が要るのではないか。

基本理念の説明文中、「大陸や首都圏から人や情報が流れ込む」とあるが、先進的な外部から流れ込むから文化の先進地ではなくて、いろいろな人が混じり合って、いろいろな刺激を受けたから文化の先進地になったのではないか。

<古賀氏>

総論は、この北九州のまちを文化や芸術でどのようにしていくのかという、まちづくりに関する大きな考え方が示されないといけない部分であると思うが、それが見えない。

今この時点で固めて書くのが難しいのであれば、この次の大きな改訂までの5年間に、そこをしっかりと議論していくということを、どこかに盛り込んでほしい。

「若者を引き留める魅力が、北九州市に不足しているとは考えられないでしょうか」という辺り、だから文化なのだという言い方は一例として挙げるのはよいかもしれないが、後の作りが若者のことをメインに考えた計画には全然なっていない。

創造都市に対する書きぶりも、何だかよく分からない。「文化で産業振興以外のこともやっていきます」みたいなことがちらっと書かれているだけ。この書きぶりは非常に不親切だし、何を目指しているのかが分からない。

「文化芸術の街に向けて」のパリの記述は、今の北九州が 20 世紀前半のパリを目指すわけではないと思うので、こういう書き方は非常に誤解を生むと思う。

シビックプライドを持ち出すのであれば、文化や芸術に関わる活動でシビックプライドを持つ市民を育成し、増やしていき、そのシビックプライドを持った市民の方たちが、地域をもっと良くしていく活動に関わっていく、人を元気にして、まちを元気にしていくというイメージがシビックプライドだと思うので、それをきちんと述べた

上で、そこに文化や芸術の力をどんなふうに活用していくのかということを書くと、創造都市論ともリンクしてくる。

【第2部「元気発進！北九州」プランにおける主要施策に基づく取組み】

<古賀氏>

前期の取組みの反省があって、そこから改訂後のプランの基本理念とか戦略というのが出てきて、政策につながっていくものだと思う。施策の中に、第2部では、「推進していく主な取組み」ということで、これは事業のレベルに近いものが出てくる。戦略の中に入らないものもたくさんあるし、ここがうまく見えるように、戦略が縦軸、施策が横軸という表にしてみたら施策と戦略のつながりが見えてきはしないか。入れてみたら、足りないところや戦略の中に入らない部分が見えてくると思う。

まちづくりの大きな方向性を示すことが難しいのであれば、今後の5年間取り組んでいくということを入れていただきたい。

今後5年間、次の改訂に向けて、北九州市を文化や芸術の力でもってどうしていくのか、どんなまちづくりをしていくのかということを検討するような仕組みづくりというのが必要なのではないか。

この計画の評価、進捗状況をチェックし評価していく機関あるいは仕組みも必要。アーツディレクターだけではなくて、そういった仕組みを検討するというのを、ぜひとも入れていただきたい。

コーディネーターの育成の部分が少し中途半端な扱いになっている。

「文化芸術の担い手の育成」ということで、例えば「文化芸術の専門家を目指す人材の育成」は作り手だけではなく、つなぎ手あるいはコーディネーターというのも、ここに専門的な人材として含まれるのではないか。担い手の育成にもきちんとコーディネーターのことは入れていただきたい。

「(3) 創造都市への取組み」というふうに書いてあるが、この部分の触れ方がまだまだ中途半端な感じがする。「社会包摂」も文言としては入れていただいたが、主な取組みの中には例としては挙げられないのだなと思った。ここは、総論の部分も含めてだが、しっかりと書き込まなければいけない部分ではないかと思い、大変気になった。

<近藤氏>

進捗状況の管理、これはこれから5年間、絶えずPDCAでチェック(C)のところをやらないと、こういう計画自体次の実施(アクション:A)が出てこないだろう。

<柏木氏>

取組みの項目の末尾に【戦略】と入っているものと、入っていないものを混在させているが、ちょっとまずいのではないか。古賀委員もおっしゃったが、戦略に入らない項目がなぜ施策に入るのかという素朴な疑問を持たれる可能性がある。

IT化については、どうやって実現するかという次のプロセスが見えない。

「アウトリーチ」「インリーチ」という用語が突如今回出たが、あれを対語にするのがいいのか。もう一度精査してもらいたい。

映画ロケ地の誘致の点で、「北九州ブームの創出」というのは、これだけ読むと、「え？これは文化芸術ですか」と思う。誘致が文化芸術と言われると、ちょっとそれは違うので、それを使ってどうするのだというのをもう少し書き込んでほしい。

2020年の文化プログラム、これは北九州らしさの文化プログラムではない。この辺はもう少し書き込んでほしい。

「社会包摂」は、もう少し何かやってもいいのではないか。障害者のバレーなども結構盛んにやっているし、バンドもある。それは福祉ではなくて、文化芸術でもいいのではないかと、その辺の守備範囲をどうするかというのも含めて入れてもらいたい。評価と進捗はぜひお願いしたい。

<今川氏>

美術館に関する記述が少ない気がする。人材の育成というのは舞台のみでないが、舞台だけに特化して書いている。

<柏木氏>

博物館も追加していただきたい。

<近藤氏>

補助金等について突然に出てくる。これは、戦略なのか施策なのかというお話が先ほどからもあるので、逆に言えば、そういう全体を通して予算というのは全てに関わっている部分であれば、別書きするという形も可能だろう。

<井生氏>

補助金の「給付」という言葉の使い方が少し気になる。

「審査・評価の充実や有効性も踏まえて検討する」というのは、主語がどこなのか、誰がするのかということ。旧市時代から既得権のような形で何十年も垂れ流しているものがありはしないかというのが、考え方。切ることが目的ではなくて、要するに、見直してどうするのか。

行政が指定管理団体との関係の中で、要するにそこまで口を出せるのかなというのが少し疑問だ。

<椿氏>

新しい「企画・立案・調整」、そのプロデューサー・コーディネーターの件だが、文化的な催しや企画、制作、展開をしていくのに一番重要なことではないかと思う。それで、その専門の人材をどういうふうに育てるかということが大きな問題で、非常に個人的なものも関わるし、その方の好みもある。また、全体を眺めてどういうふうにするかというバランス感覚も必要であるし、この専門人材を育成する部分も、少し慎重にいろいろな角度から見ていただきたい。

中央の人が来て、「これをやりましょう」ではなくて、この街にどういうふうに必要なか。ただし、外の空気も入れなければいけない。その辺のバランスをどういうふうにとっていくか、この人材育成は非常に大切な部分だと思う。

<津村氏>

私も、劇場文化だけを取り上げているというのはすごく違和感がある。

今後5年間ずっと検証、話をしていかないといけないという中に、名称はいつでもいいが、アーツカウンシル的な団体をつかって、そこできちんと議論を続けていくことや、ネットワークをつかっていくことをやらないといけないのではないか。

アーツカウンシルは、評価だけをするのがアーツカウンシルだと思われる節がある。アーツカウンシルという名称にはこだわらないが、どういう組織をつくればいいのかということをし少し勉強していただければありがたい。

プロデューサー・コーディネーターのところだが、ここもすごく大切なので、この教育機関的なものを今後つくるために、この何年間かで、きちんと検討して進めていくということをし、明示したほうがいいと思う。きっと、それをやらないと北九州からは生まれえないと思う。

北九州には、ものすごくいい意味での、文化施設としてのフィールドがある。この現場をいかに有効に使って、そういう人たちの人材育成をしていくことを考えれば、全国の中でも有数な地域。そこをきちんと今後の形としてつくっていくべきだと、それは明示したほうがいい。

「補助金のあり方」というのは、言葉を変えましょう。これは全国みんな一緒なので、限られた予算をいかに有効に使っていくのかというようなニュアンスの文にしていかないといけない。財政課はこういうことを提示することが仕事なので仕方ないが、文化振興計画にこの表現は恥ずかしい。これは財政計画の報告書ではない

<羽田野氏>

盛りだくさんにあれこれ書かれているが、市民に理解しやすいように作成してほしい。

表やグラフを効果的に使いながら、ポイントとなる見出しを2つ3つ挙げ、より簡潔に分かりやすい文章で表現してほしい。

補助金・指定管理はあえて入れる必要はないのではないか。

<近藤氏>

バランスをとりながら、どこをこの5年間でやるかという、その選択と集中というものが絶対必要になってくるので、そういう目立つところ、とんがりの部分というのを、やはりきちんと作っていくべき。

<三船氏>

コーディネーターの必要性は大切であるが、どこでどういうふうに育てるのかという具体性が全然伝わってこない。

推進していく取組みの中で、㊦と書かれたものが新規事業と限られてないこと、㊦と示されていないものがこれまでの取組みを継承したものとなっていないものもあるので、整理して示す方がよい。

<今川氏>

この街には「小さい旗」という児童文学の雑誌が60年続いていて、そこから児童詩や児童文学を書く人が育っていった。「児童文学の顕彰」と言ってしまうと、過去の業績を褒め称えることだけの意味にとられがちなため、今、現在、子どもたちに読ませたい詩や児童文学の書き手を育てる活動も盛んにしましょうという意図も含むような書き方をしていただきたい。児童文学はこれからとても大事だと考えている。

【第3部 主な拠点施設における取組み】

< 柏木氏 >

各館ボランティアは必要で、今でも活動しているので、何かまとめてどこかでしたほうがいいのではないかと。

井生委員が提案した、芸術劇場のいわゆるレジデント劇団。

響ホール室内合奏団も、ある意味ではレジデント合奏団的な扱いを今しているが、位置付けはしていない。せっかく良い提案なので、検討項目でも挙げていただいたらいいのではないかと。

< 井生氏 >

仮称でキッズシアターとかシニアシアターの検討を少なくとも文言に残っておかないと、検討もできない。

< 古賀氏 >

個別の施設に関する記述のみで、各施設をつなぐことに関する記載がない。例えば、CCAと美術館は今どんなふうに連携されているのか、これからつながりがどう発展していくのか、歴史的文化的なものやものを扱う施設と最先端のものを扱うCCAは何か連携できないのだろうか、そこから新しいものが生まれてこないのだろうか。

< 近藤氏 >

文化施設もにぎわいに、成果としてつなげたい。いわゆる文化施設を横に並べて連携することも必要だし、それをマップ上で表すと空間的に見える化でき、こういうルートで観光ルートができるのではないかとすることがあり得る。

< 今川氏 >

文学の拠点に図書館が最初に挙げられている。文学の拠点が図書館というのは違和感を持つ。図書館というのは、人類の文化遺産の記録の集積であり、文学に限らずあらゆるものを含んでいる。今や図書館の役割は非常に広がっている。

< 羽田野氏 >

一般的に北九州の文化芸術は、どの程度に評価されているのか、専門家の皆さんにお尋ねしたい。

< 津村氏 >

全般的に見ると、今、現状においては、北九州は全国的にレベルは高いし、注目を受けている幾つかの都市の中の一つ。

< 三船氏 >

第2部の戦略や施策からは、「このような方向でこのようなことをやっていきます」というスタンスで、拠点施設別における取組みでは「こんなことができる」というスタンスで表記すれば、活用しやすいのではないかと。